コウノトリの卵

むかし、薬屋が大きだ風呂敷さ、薬箱背負(し)って回ってあったもんだってねぇ。ずーと山道だが、何道だが歩(あん)いて行ったば、蛇が、蛙どご飲むとこであったって。したばその薬屋、「ヘビ、ヘビ、そのカエルはなしてやれ」ってしたど。したっけ「オレいま腹減って、それどご飲まねばなんねぇった」としたど、蛇まだ。「したば、俺(おれ)どごに娘三人いらんて、んがどごさ娘けら

んて、はなしてやれ」ってしたって。したば、それ、はなしてやったたなぁ、蛇まんだぁ。さぁ、今度薬屋、家さ戻って来て、誰それ、俺いま、こういうもんでこんだぁって言ったっけ、一番目一番先の奴どご呼ばったっけ、「だぁー、へビさ俺、嫁なって行ぐってさぁ」しゃべったわけだ。さあ二番目来たば、二番目もその通り。「だぁー、俺へビとこさ嫁なって行ぐってさぁ」としゃべったど。さあ、三番目きたっけ、三番目の賢し子だど、「俺行がんてだに、なんも寝でねってもいいやんて、それ起ぎれ」ってしたど。その薬屋なんぼか苦したもんだったか、なんぼ娘でも、けでやるがらにして、なんぼでも苦さったど。蛇どござ、嫁にけでやらったもの。「俺行がんて起きれ。なんも心配さねってもやあんて、起ぎれ」ってしたど。だんだん日にち暮らして、蛇どござ嫁に行がねばなんにゃったな。蛇もまたちゃんと紋付き着て、化げて、いい男なって貰いに来たわけだ。迎ぇに来たど、蛇、はぁ。さあ、三番目の賢し子まだ、嫁なって行くって、その人の後付いて行ったど。「へビどござ嫁にけでやっけ、なんだことすんもんだべぎゃぁ」と思って、それこそら、隠れて見てやったな、その薬屋また。どこで見たんだか見に行ったどう。したば、今度やっぱり、部屋さ入って、蛇グルグルグルとヘッチョまくりしてだと、「俺へッチョまくりした上さ、あがれ」ってしたど、娘に。それまぁ、あがれってするもの、上がったべゃぁなぁ。そしてまぁ四日も暮らしたっけ、わらしっこ持つ人、なったわけだ、娘が。したどごろでだんだんだんだん暮らしったっけ、だんだん出産近くなったてねがぁ、わらしっこやぁ。そして、家に二人して居だどござ、白髪の婆さん、寄って行ってあったど、そごのい家さ。「だんだん俺こうして、わらしっこ持さったばって、どうへぇばええんでえらが」としたことが、その白髪の婆さんがそれ、「これだっけ、ただ持だいねぇ」ってしたど、白髪の婆さんが。「コウノトリの卵飲まへねば、それ産まれてこね」ってしたど。んだために、「コウノトリの卵取るってへば、どさ行ったらえべか」ったっけ、「なんてらの木のいちばーんのてっぺんさ、卵産ってるだめに、卵を飲まへねばそれ生まれねね」ってしたど。したために蛇、コウノトリの卵、取んに行ったもんだ。白髪の婆まだ、そごの家に居だべし。なんぼ手、延べでやっても、コウノトリにつつかれて、その卵取ってこれねがったど。したところで白髪の婆さん見に行ったところが、蛇、下さ落ちて死んであったど、話っこだな。「おー、いがった、いがった」って、そのわらしっこ持つ娘いがったって、どうして蛇と連れてるものな。「おめどござ、何でもいい物あげる」ってしたど。「なんもそれだばいいども、盥さ水汲んで、盥またげば産まれらんてがに」ってしたば、やっぱり蛇産まれてきてあったてねぇ。話っこだな。娘は白髪の婆さんに「なんでも欲しいものあげる」って言ったど。婆さんは「何もいらねぇ、俺どござ、さっとした池っこ掘ってけれ」てしたって。したために池掘ってやったばさ、そこさトーンと跳ねて行ったば、蛙だったっけ。したために、蛙が、

蛇かじってらじはなしてやれってしたために、蛙が助けに行ったったべ。したために、おら親やぁ、その池、今でも何たが池になってらんだが、大阪さ行げば鴻池って今でもあっとう、ってさぁ、しゃべってあったでば。

幸坂ツル（常盤・大正13年生・74歳）

《解説》

話の順序はこうなる。①蛙を飲み込もうとしている蛇に、薬屋が娘を嫁にくれるからと離してもらう。②嫁に行った娘が身ごもる。③そこへ白髪の婆さんが来て、コウノトリの卵を呑まなければ産まれないと言う。④夫である蛇は、高い木に登って卵を捕ろうとするが、コウノトリにつつかれて木から落ちて死んでしまう。⑤白髪の婆さんの求めに応じて池を掘ったところ、婆さんは池に飛び込んで蛙になった。かつて蛇に呑まれそうになった蛙が、その恩返しに婆さんに化けて娘の危急を救った。ここでは三人娘が登場し、末娘が損な役割を演じていること、「ヘッチョまくり」の多少艶色的な部分が付け加えられていること、盥（たらい）にまたがって生んだ蛇のことについて結末がついていないこと、など他の地域の類例と異なる点や、混同している点がある。薬屋が呉服屋・豪商であったり、コウノトリが鷲や鶴であったり、嫁入りを苦にした娘が病気になって、その病気を鶴の卵で治そうとするなど、さまざまな類話がある。